

【井口寛司選手略歴】

昭和37年	和歌山県日高川町にて出生。小中学校時代は、日が暮れるまで野球に没頭。
昭和62年	修習生チームの要として法曹野球にて活躍し神戸Lawyersや裁判所・検察庁をおびやかす。
平成元年	検察庁を袖に振って神戸Lawyersに入部するも法曹野球でも勝てないLawyersに切齒扼腕。
平成3年	幸寺・藤掛のバッテリー入部を契機に井上史郎監督の厳命により新チーム・神戸ドルフィンズの結成に尽力。鬼軍曹よろしく藤本二等兵の強化教育にも力を注ぐ。初参加の全国大会予選・広島戦でサヨナラ負けを喫しド軍替え歌第1号「ひろぎんの森夏景色」を制作発表。
平成4年	外野手と投手を兼任するも、マウンド上では制球難に苦しむ。ただしセンターからのストライクには目をみはるものがあった。
平成5年	大阪・京都を破って全国決勝大会（神奈川県・平塚球場）初出場の切符をつかむも、一回戦の札幌戦に惨敗し、全国大会レベルの高さを知る。
平成6年	神戸開催の全国大会。一回戦の岐阜戦で「ワンマンショー」さながらの大活躍。準決勝の広島戦には敗れるも、この大会での「広島優勝」に納得、再起を誓う。
平成7年	阪神大震災により練習場所を失う雌伏の時代に入ったが、合宿や遠征等を継続し野球への情熱だけは失わず。「野球心得書」を基本書にペーパーテストも実施。
平成12年	但馬ドームにて大阪・京都を破り、名古屋ドームで開催された全国大会に出場。横浜マリナーズとの「日弁連野球の球史に残る」とまで言われた激戦を制することは出来なかったものの、神戸ドルフィンズの名を全国に知らしめる。
平成13年	前年、名古屋ドームでの逆転満塁HRに満足して引退した藤掛捕手の跡を継いで井口捕手が誕生。両膝をついたままセカンドへ送球可能な強肩が全国的に轟く。
平成14年	埼玉・西武ドームにて開催された全国大会に出場。開会式前の一回戦で大阪とあたるという藤本代行の「クジ運の悪さ」に泣く。
平成15年	札幌ドームにて開催された全国大会に出場。一回戦の新潟戦を制したが、準決勝の東京戦に敗れる。東京のヤジが大阪とドッコイドッコイだと知る。
平成17年	大阪ドームで開催された全国大会に出場。初戦で「因縁の大阪」とあたるが、これを見事に撃破、勝利の美酒に酔い即興替え歌も披露。準決勝札幌戦では惜敗。
平成18年	北九州市民球場にて開催された全国大会に出場。以後、予選の壁に阻まれる。
平成22年	予選ブロック決勝で大阪と同点引分となるもジャンケン勝負に敗れ全国大会（名古屋ドーム）出場を逃す。予告どおりこの年を最後に井口捕手は現役を引退。
平成26年	前年から始まった「マスターズ大会」に初出場。札幌「つどーむ」において井口捕手が限定復活。夜の懇親会での替え歌披露が「マスターズ大会」の定番に。
平成30年	新人を伴い「三港戦」のため横浜まで遠征。久々に現役選手とともに戦う。
令和元年	井口選手の念願であった「マスターズ大会」にド軍としてのチーム出場が叶い、幸寺・藤掛のバッテリーも復活。ド軍打者一巡の猛攻で札幌への「御恩返し」も実現。
令和4年7月3日	逝去（享年60歳）



編集・発行：2023（令和5）年1月20日

「神戸ドルフィンズ 井口寛司選手を偲ぶ会」呼びかけ人

羽柴 修 藤本尚道 幸寺 覚 戸谷嘉秀 吉田裕樹 中馬康貴